科目区分：専修別専門教育科目（美術）／芸術文化課程　造形芸術コース
授業科目名：日本美術史

地域における美術作品を通じて、日本美術史を学ぶ

美術教育専修　上原真依

Ⅰ．授業の概要

「日本美術史」は、学校教育実践コースおよび芸術文化課程の3年生を主な対象とした必修科目である。本年は、造形芸術コース9名および音楽文化コース1名（いずれも3年生）の計10名が受講した。

1)　授業目的

・仏教美術を概観し、その特色を理解する。
・時代ごとの文化背景を踏まえて、造形表現との関連性を考察する。

2)　到達目標

・日本の美術作品を的確に視る能力を高める。
・日本美術の基本的な流れを掴み、各時代・流派の様式を理解する。
・作品の機能や制作当時の社会的・文化的背景など、観賞教育に必要な基礎的知識を獲得し、美術作品を歴史的背景との関連性から考察する術を身につける。

3)　関連するディプロマ・ポリシー

造形芸術全般にわたる確かな知識と，得意とする分野における高度な専門的知識を修得している。（知識・理解）
造形活動などの自己探求を継続する中で課題を明確にして，主体的・自律的な学習ができる。（関心・意欲）

4)　今年度、特に意識して取り組んだこと

美術作品を正しく理解するには、まず本物を実際に見ることが重要である。しかし、首都圏や関西と異なり、愛媛県下では仏教美術に接する機会も限られている。

作品を実見することは、作品の面白さに気づき、作品を積極的に読み取る姿勢を育む基本である。実物を見て作品について考え調べる習慣を獲得すれば、授業時間外のみならず生涯にわたり美術作品を学習し続けられることは言うまでもない。そこで本授業では、実作品を見ることへの関心を高めることを意識し、見学の機会を設けることとした。特に2016年度は、瀬戸内国際芸術祭の開催に合わせた東光寺（本島）での特別拝観、道後地区を中心とした山口晃作品の展示が行われているため、仏教美術関連する現代アート作品の見学も取り入れることとした。

5) 授業方法、形態、内容の概要

本授業は先述した取り組みを踏まえ、①教室で作品実見に役立つ仏教美術の基礎知識を学習すると同時に、②瀬戸内海本島（香川県）東光寺の薬師如来坐像（平安時代）および③愛媛県美術館で開催された山口晃展の見学実習を行った。

①仏教美術入門編と代表作例

見学実習で実見する薬師如来坐像は平安時代の定朝の流れをくむ作例であるが、その特徴および技法を正しく理解するためには、仏教美術に関する基礎知識と日本における仏像の変遷を学ぶ必要がある。そこで、仏の種類（如来・菩薩・明王・天）ごとの特徴を紹介しながら、仏像の技法、代表作例を紹介した。

②薬師如来坐像（本島・東光寺）の見学実習

当該作品は通常非公開であるが、本年10-11月の瀬戸内国際芸術祭秋会期中は、檀家さんに予約をすれば特別に見学できることになっていた。四国においては珍しい大型の薬師如来坐像で残存状態も良好な作品例であるため、この機会を最大限に活かすべく8月より観光協会および檀家さんとの連絡をとり準備を進めた。また本島で開催されている瀬戸内国際芸術祭は、地域における芸術作品の発表の場としてだけでなくアートを通じた町おこしや、地域住人とのコラボレーションからも、近年非常に注目されているイベントである。そのため、東光寺見学後は自由に島内の作品を見て回り、芸術祭を体験できるように配慮した。見学日については第1回にアンケートを行い、受講生の都合を聞いたうえで、11月5日（土）に実施した。本島にわたる丸亀港フェリー乗り場までの往復には愛媛大学公用車マイクロバスを利用した。

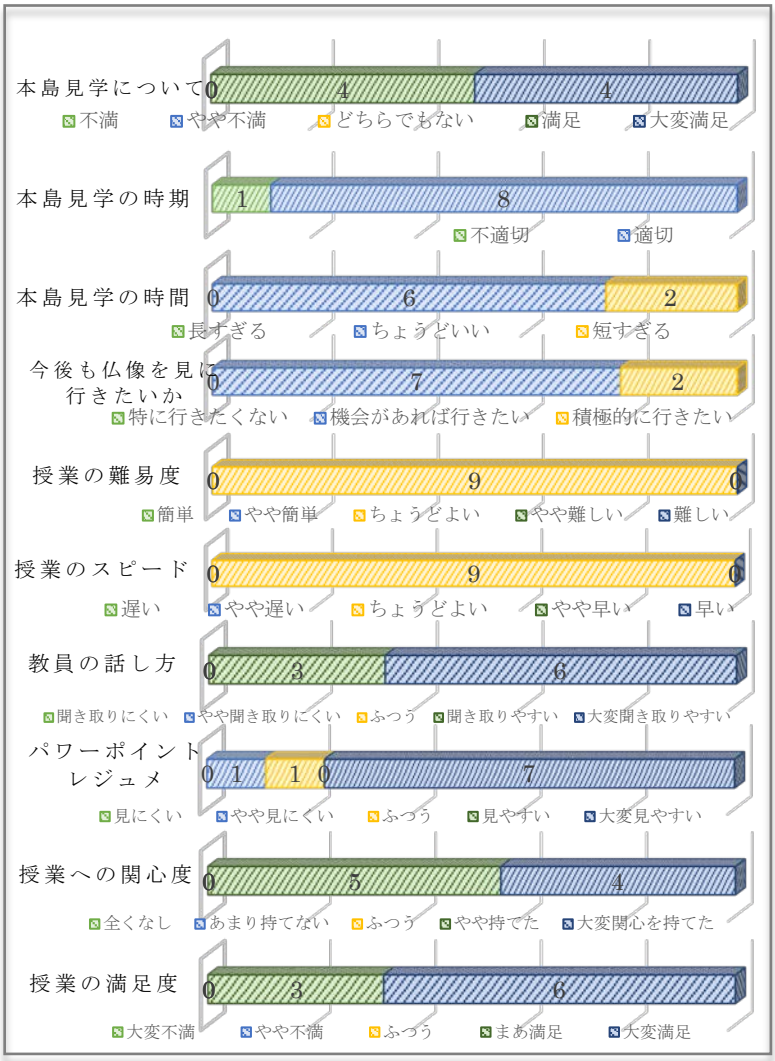
③山口晃展（愛媛県美術館）での見学実習

2014年より始まった道後地区で始まったアートフェスティバル（通称：道後アート）の2016年度メインアーティストとして、山口晃が選出された。山口晃の作品は、《来迎圖》（2015年）

に代表されるように、仏教美術の形式を踏まえていたり、《百貨店圖　日本橋三越本店》(2004年）のように洛中洛外図などの日本美術の様式を採用した作例も多く、日本美術への関心を引き出す糸口になると考えた。そこで愛媛県美術館の担当学芸員の協力を得、11 月 1 日 12：30 より見学実習と学芸員によるギャラリートークを行った（見学日時は学生へのアンケートで決定)。

Ⅱ．アンケート結果

アンケートは独自の質問項目で第 15 回授業終了後に無記名式で実施した。質問は選択式 10 項目と、自由記述式 3 項目で、9 名が回答。集計結果は下の通り。なお紙面の都合上、自由記述回答の同意見はまとめて記した。



[本島見学実習について]（自由記述）

・他の授業の手伝いで行けなかった　・自由にアート作品を見て回れてよかった（2 名）　・普段見られない仏さんと瀬戸芸も一緒に見られてよかった

・作品だけでなく島の景観や雰囲気がよかった

[山口晃展（愛媛県美術館）見学について]（自由記述）

・発想が自然体でとても面白かった　・見ごたえ十分だった　・作品が格好良かった　・興味があったので見学できてよかった　・色の組み合わせが好きで楽しかった　・ギャグなどユーモアのある作品が多く楽しかった

[授業全体の改善点や良かった点]（自由記述）

・見学が多くて楽しめました

・豆知識的エピソードもあって楽しい授業でした

・色々なところへ行き美術に触れる機会を沢山作ってくださって嬉しいです。これからも授業以外の見学にも積極的に参加したいです

・自分で行くととても大変なので、見学実習はとてもありがたいです

Ⅲ．　総括

1)　アンケート結果を踏まえた、次年度への改善点

今年度は日本美術史関連作品を見られる機会が多かったことから、2 回の見学を設定した。ただし 2 回とも開催期間が短く、東光寺の見学は予約制ということもあって日程調整が難しく、見学に参加できなかった学生が 1 名いたことは反省点である。授業開始後にアンケートを取ると開催まで余裕が無いことから、今後は授業開始前の事前アンケートの導入を検討したい。

2)　授業の目的、到達目標、関連 DP を踏まえた総括

アンケートおよび見学実習に関する取り組み方から、授業の目的や関連 DP の（知識・理解）（思考・判断）はほぼ達成できていると考える。特に実物を見て思考する楽しさに気づき、美術作品への関心を高められた学生は多かった。多くの学生が今後も日本美術を見る機会があれば行きたいとアンケートで回答していることから、今後は作品を実際に見る機会を自ら設定できるような取り組みを考えたい。

3)　地域を核とした教育と研究のつながり

報告者の専門はルネサンス期の西洋美術史であり、特に 15 世紀のイタリア・マルケ地方において祭壇画がどのような社会でどう受容されていたかを研究している。美術館で「作品」として観ると忘れがちだが、美術作品と作品が受容された社会を切り離すことはできない。これは日本美術史の作品においても同様である。本年度は今も本尊として祀られている東光寺の仏像と、道後アートに招かれた山口晃作品を見学したが、本島の人々や道後の景観と結び付けて作品を観賞した学生も多く、美術作品と社会の繋がりを実感しやすかったように思う。まさに地域における作品とその受容のあり方を核とすることで、学生も作品をより身近なものとして考察することができた。今後もこうした地域の作品見学を活用した授業を、実施していきたい。